潜入レポート

学部公開

飛翔編集委員数名による決死の潜入レポート

11月4日と5日にわたって各コースごとの教育・研究活動の内容が一般に公開された。

▲家族連れで仲良く見学

自然環境研究コース

普通なら敬遠しがちな専門的な内容を図や表を用いて分かりやすく説明していて見応えがあった。

生体行動科学コース

色々な装置を配置して見学者に実際に体験してもらっていた。音楽が体に与える影響を測定するボディソニックが一番よかった。

●公開内容●

- ●生体行動科学コース
  - パネル展示　実験・測定のデモンストレーション
  - 展示物　ボディソニック　体脂肪計　恋愛類型判定
  - トビハゼ
- ●自然環境研究コース
  - パネル展示
  - 展示物　ナガサキアゲハのさなぎ
  - 日降水量分布の時間変化
- ●物質生命科学コース
  - パネル展示
- ●数理情報科学コース
  - パネル展示　ビデオ
  - 展示物　CG上映「SIGGRAPH '93」
- ●外国語コース
  - 各教官の著書紹介　ビデオ
  - 展示物　各外国語の教科書・辞書　外国の土産物
  - マーチン・ルーサー・キングJr上映
- ●地域文化コース
  - パネル展示　各教官の著書紹介
  - 展示物　作家の原稿　外国の土産物・写真
- ●人間文化コース
  - 各教官の著書紹介
  - 展示物　絵
- ●社会科学コース
  - 毒ガスマスク展示

▲一番にぎわっていた生体行動科学コース

▲真剣な眼差しで見つめる編集委員 No.1

外国語コース

多くの外国語の書物に触れる事ができた。キング牧師の演説に胸を打たれた（英語が理解できなかった？）編集委員一同だった。

人間文化コース

ずらりと並べられた教官の著書を読みあさる編集委員

▲真剣な眼差しで見つめる編集員 No.2

▲総科志望の高校生かな？

物質生命科学コース

壁一面にパネルが貼り出されていた。院生の人が丁寧に内容を説明していた。

飛翔50号目次

グラビア：潜入レポート・学部公開／安芸の秋は賀茂にカモン！

巻頭言にかえて：金田　晉（広島大学統合移転完了記念事業式典・祝賀会部会長）…… 1

総力特集・広島大学統合移転完了記念行事フェニックスフェスタ

シュミット氏講演会…… 2

国際シンポジウム…… 3

スピーチコンテスト＆パネルディスカッション…… 5

総科体験入学…… 8

小特集１：心のオアシス・学生相談室があなたを待つ……16

社会からの声：

市と大学を結べば　富吉邦彦（東広島市議会議長）……18

一緒に『まちづくり』をしよう　上向　隆（東広島リビング新聞社編集長）……20

賞をもらって

「私と中国語」佐々木美保（社会科学コース３年）……22

「大学生第２回懸賞論文－21世紀のエネルギー・環境問題を考える－に入選して」
山西敏道（生物圏科学研究科博士課程前期１年）……23

よりよい授業を目指して

「学生と教師が共に学んで行かなければならない」鎌田　勇（外国語コース講師）……24

小特集２：総科サークルの実態に迫る……26

総合科学部の就職事情は今……29

エッセイ

「就職活動へのアドバイス」西川節行（地域文化コース講師）……30

「TYA IN CANADA」Alice Hamilton Luther（外国語コース助教授）……31

「総合科学と私」上領達之（生体行動科学コース教授）……32

「My NewZealand」友田淳子（学生係）……33

「インターネット事始」村上久恵（LL準備室教務員）……34

「総合広大に集合」Chie Hirose（社会科学研究科１年）……36

研究室紹介

堀越孝雄研究室（自然環境研究コース）……38

山田純研究室（外国語コース）……39

堀忠雄研究室（生体行動科学コース）……40

高谷紀夫研究室（地域文化コース）……41

新任教官紹介・人事異動……42

読者からの手紙……46

編集後記……48

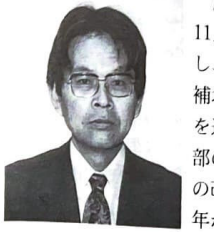
伝言板・募集……50

巻頭言にかえて

広島大学統合移転完了記念行事

金　田　　晉

（広島大学統合移転完了記念事業式典・祝賀会部会長）



広島大学は、1972年11月統合移転を決定し、翌年２月多くの候補地の中から西条地区を選定した。総合科学部の前身である教養部の改革運動は既に1969年から始まっており、このころその改革構想が具体的な形をとりはじめ、1974年６月総合科学部が発足する。このころ、広島大学の大学院の全体的整備構想もきわめて大胆なかたちで構想され、文部省との折衝をおこなっていた。1960年後半からはじまっていた、大学の変貌と近代的学問への懐疑の状況の中で、広島大学は教養的教育と大学院教育の抜本的な見直しとそれを受け止める器としての「統合されたキャンパス」の創設を開始したのであった。

それから1982年の工学部移転を最初に、1993年わが総合科学部が西条キャンパスへと移り、実に23年の月日をかけて、本年3月法学部、経済学部、学校教育学部の移転をもって９学部の統合移転が完了したのである（医、歯両学部は移転せず）。実に1949年広島県民と大学関係者の文化都市の中核としての「自由で平和な〈一つの大学〉」（森戸辰男初代学長式辞より）を創設したいという熱い願いの地理的基盤がようやく現実化したのである。

こうした歴史を受け止めるかたちで、さる11月１日の記念講演会、記念式典・祝賀会（総合科学部・医学部・本部庶務部担当）を皮ぎりに、主に1週間、大学全体と各学部、また学園都市として1974年誕生した東広島市においてかずかずの記念の企画が催され、12月３日のフェニックス駅伝で終止符を打った。

記念講演には、元西ドイツ首相H・シュミット氏が「追憶・悔恨そして責任」という題で、総合科学部大講義室（L102号室、540人、同時通訳）で一時間熱の入った講演をおこなった。向かえの教室（K101号室、180人）にはモニター・テレビを設置したが、なお廊下に聴衆があふれた。氏は第２次世界大戦中のドイツと日本において共通した軍部の権力集中の構造への分析から論を起こし、自身もまたその例外とはなりえなかった戦時下の狂気への悔恨を告白しつつ、日本はアジア侵略の率直な反省を基にアジアの平和の実現に貢献するべきであること、国際平和の全体の中でアジア地域が今いちばん注目されていることを指摘し、若者への限りない期待を語られた。

記念式典・祝賀会は総合科学部西隣の西体育館で開催され、文部省、広島県市関係、大学関係、移転事業関係者、地域住民、名誉教授等、約700名の来賓が出席し、当日は朝から晴天であったことも手伝って、総合科学部の周辺は終日賑わった。

また、記念の企画として『広島大学統合移転完了記念誌1995・翔べ！フェニックス』が刊行された。「統合移転完了までの歩み」、「二十一世紀に向けての広島大学」、「資料編」の３部から構成され、学生、卒業生、教職員のさまざまな表情と発言と足跡が盛りこまれている。同窓会を通じて案内されていると思うが、なかなか充実しており、ぜひ手にとっていただきたい。

特集

総力特集　フェニックスフェスタ(移転完了)

昨年11月、広島大学統合移転完了記念事業フェニックスフェスタが行われ、１日の元西ドイツ首相シュミット氏の講演を皮切りに、様々な行事が開催された。そこで我々飛翔は、広大フォーラムに先を越され、かつこの号の出版時期には季節外れの話題になる事を承知の上で、各行事に編集委員を送り込み総力を挙げて取材を行った。

シュミット氏講演会

シュミット氏のプロフィール

1913	ハンブルクにて生まれる
1945－1949	ハンブルク大学にて経済学専攻
1965－1987	ドイツ連邦議会議員
1974－1982	ドイツ連邦共和国首相

広島大学総合移転記念フェニックスフェスタのメイン行事である元西ドイツ首相ヘルムート・シュミット氏を招いての講演会が11月１日総合科学部大講義室において行われた。まず最初に原田学長からシュミット氏に広島大学名誉博士号が授与され、その後講演に移った。シュミット氏はこの講演を「追憶、悔恨そして責任」と題し、第二次世界大戦後の五十年を振り返りながら、世界平和のために日本が何をすべきか、そして私たちに何ができるかについて講演した。

シュミット氏は日本の戦後の対応をドイツと比較しながら、日本の戦後のアジアの国に対する対応がまだ十分なものではないことを指摘し、一つの盟友であるアメリカとの関係が貿易摩擦の問題などで不安定な現在の状況では、アジアの国々に過去の戦争犯罪を償うために適切な対応をする事がこれからの国際社会で日本が指導力を発揮するのに重要なことだと話した。また、「平和の維持は、人間性の内部に組み込まれ本能によって体現されるものではなく、平和は意志的にそして誠実に何度も繰り返して打ち立てられなくてはならないものだ。それは政治家の重大な使命である。しかし、私たちはそのすべてを政治家の手に委ねてはならない。私たちには彼らの行動や成果、失敗を観察、掌握、判定するという民主的義務を超えて、自らの国民の歴史を理解し、制約や偏見に束縛されない自由な立場から業績と失敗を評価するという義務が存在するのです。」そして最後に「あなたたちは過去の出来事に対する責任を負ってはいません。しかしこれから作られる未来に対しては、重大な責任を負うことになるのです。よりよい未来を作るためにに何ができるかを考え、それを理性と勇気と合理的な考えを持って実践し現実のものとして欲しい」と呼びかけた。

自らも第二次世界大戦で兵役経験を持ち、その後の世界平和のために活動してきたシュミット氏の戦争に対する考えはとても論理的で説得力があり、私たちがこの被爆地広島で平和や戦争について考え、行動していく上で参考にしなければならないことがあったように思う。

その後、L201 でシュミット氏と学生との対話集会が開かれ、「アジアの中で孤立する日本」「国際貢献」の問題などについて、大学院生や留学生から質問が出た。この対話集会は通訳なしのすべて英語で行われたため、我々無能な編集委員には内容がほとんど分からなかった。という訳で、これ以上の内容への深入りはできませんのでご了承頂けますようお願い申し上げます。

(学生編集委員：原森義則)

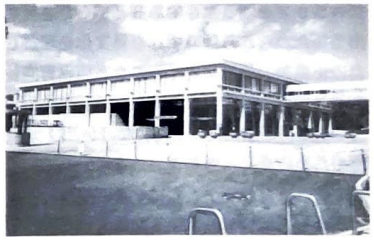
国際シンポジウム

11月２日、３日にかけて広島平和記念公園の国際会議場にて、国際シンポジウム「アジアの時代と日本」が開催された。我々飛翔スタッフは３日の総括討論に出席し、そこで行われた討議を取材した。

３日のシンポジウムは前日行われた第１、第２、第３の各分科会の代表者による要約で占められた。第１分科会では「アジアにおける異文化の共存」がテーマで代表者の上智大学外国語学部教授の石井米雄氏がその報告にあたった。まず、マラヤ大学客員教授のアリフィン・ベイ氏の「文化とは人生の意味を教えてくれ、その根底には宗教がある。」「自文化絶対主義は精神の未成熟だ。」という発言が挙げられ、自国の文化を知り、大事にすることとともに、他文化理解の必要性が認識された。また、ベイ氏は経済大国であっても文化発信国でない日本を「silent major power」と比喩した。続いて広島大学大学院国際協力研究科長の山下彰一氏は宗教問題に触れ、日本では戦前の皇国史観からくる宗教弾圧の反動で戦後、宗教が野放しになっているとして注意を促した。釜山大学教授の金日坤氏は東アジアの経済発展背景に政治・社会倫理を包有する儒教文化があると指摘。また、17世紀の日本の鎖国が古代から続く東アジア諸国と日本との人的交流を途絶えさせ、その事が今日の日本の表面的で独善的なアジア観をもたらしているとし、日本はアジアの多様性を学ぶべきだと批判した。結局、この分科会では「多様な文化と豊かな経済、即ち精神文化と物質文化との共存」がこれからのアジアにおける課題であると結ばれた。

続いて、「21世紀におけるアジア安定の政治的条件」をテーマに行われた第２分科会の座長である大東文化大学法学部教授の黒柳米司氏が同分科会の報告を行った。その主旨は「冷戦後のアジアには楽観的な見方と悲観的な見方という二つの見方が共存しており、両者を裏付ける事態が同時進行している。この様な状況下で21世紀のアジアの安定は、米中日の動向及び役割が重要となる。というのは、米・中・日いずれの国も経済、安保、その他様々な問題でアジア地域に深く関わっており、この三国を切り離してアジアの安定を語ることはできないからである。冷戦後、〈大国決定論〉から〈地域自助論〉へ、軍備拡張から経済重視、対決から対話へと三重の転換が〈力によらない秩序の構築〉への条件を整えつつある。我々アジアが積極的に発言できるときが来た。」というものであった。その他、シンガポール大学のリー・ライ・ト教授の「中国脅異論は相互理解の不足からきている」やフィリピンの作家、F. シホニール・ホセ氏の「もっとこの様なシンポを行い、日本がアジアの安定に責任を果たすべきだ。」などの発言もでた。最後に、神戸大学法学部教授の五百旗頭真（いおきべ・まこと）氏は「歴史は絶えず、現実主義と理想主義の両方の動きがある。片方だけで考えていると、もう一方によって覆される。」と指摘。さらに「アジアの経済発展はアジア域内だけで完結するのではなく、もっとグローバルな動きの中での自由な経済活動が発展の基礎である。」と述べた。

次に「アジアの開発と教育」をテーマとした第三分科会の報告が座長の名古屋大学大学院国際開発研究科教授、潮木守一氏から行われた。その内容は「我々は科学技術を取り入れつつも、価値教育を行う必要がある。戦後の日本を見れば分かるように、米国流民主主義の流入によって〈富への追求〉が正当化され、追いつけ追い越せをモットーに、〈富んだ国〉へと猛進し続けた。しかし、個人の利益追求は経済発展の源泉にはなったが、一方



で弱者を救済するといった得にならない（儲からない）行為が置き去りにされてしまう結果となった。私たちは経済重視の国家レベルの援助（ODA）と共に市民の草の根レベルの援助・交流を知り、体験する必要がある。考え方の多様性が必要である。」とまとめられた。これに対して、「NGO よりODA のほうが大事」「根回しや調整といった手法をとるアジア型リーダーシップの導入」などといった意見が出された。また、リー氏が「欧米化した日本のアジア回帰、即ち、歴史教育の見直し」等を挙げたのに続いて、ホセ氏がJICA の硬直化を指摘、NGO 強化の方向を示した。ホセ氏はまた、「アジア諸国は経済面で日本を見習ってきたが、今度は日本が文化面でアジア諸国と相互理解を深めようとする態度をとるべきだ。」と指摘した。

最後に、総まとめとして「アジア時代における日本の進路」について話し合われ「日本のアジア化」や山下氏の「正しい歴史教育、異文化理解教育の必要性」など様々な意見が出された。山下氏が言ったように「喉に骨が刺さったまま」で統一的な意見が結局、出されないままでシンポジウムは終わってしまったが、まず何よりもこういった議論を今後重ねていくことに意義があるように思われた。

（学生編集委員：佐々木将）

論じられた内容は表向き非常に多岐にわたっていたが、その中で一貫していたテーマは、結局異文化理解の重要性ということだったように思われる。第一分科会で述べられた、自国の文化を知るための異文化理解・尊重ということにおいてはもちろん、第二分科会でも中国や北朝鮮の脅威論は理解不足からくるということ、第三分科会では欧米化した日本が歴史を見据えた上で再びアジアで発展のリーダーシップを取るべきであるといった意見が出ていた。これらはいずれも異文化を理解し合って協調関係を築いていこうという方向性を示しているのだろう。

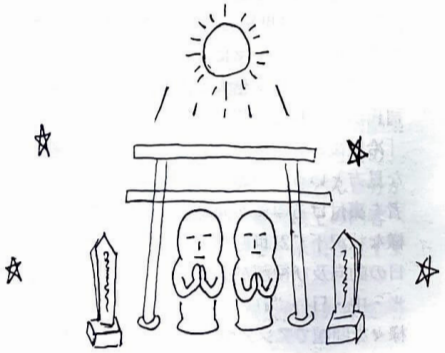
しかし何が喉に刺さった骨なのかというと、何のための異文化理解かという点で共通の見解がなかったという事ではないだろうか。と言うのも、アジアの共存とか異文化理解という事はしばしば言われるのだが、それ自体無条件に良い事としてとらえられてしまうため、異文化理解を通して何を達成しようとしているのかが見えにくくなっているようにシンポジウムを通じて強く感じたのである。

本当の目的は結局、自国の経済発展ではないのだろうか。第一分科会で述べられた「多様な文化が豊かなアイデアを生み、それによって経済発展を目指す」という言葉からもそれはうかがえる。軍事的な脅威も、経済発展に対する障害となるから相互理解で解消しようというのだろう。冷戦期においてもおそらく経済を中心に政治が動いてきたのであって、軍拡競争から経済重視、対決から対話へと変わってきたというのは、やや一面的な見方ではないか。第三分科会でのODA と NGO のどちらを重視するかという論点も、国の経済発展と民衆の生活のどちらをを第一とするかという事だろう。援助される側は自らの発展を目指し、援助する側は経済進出の足場固めのためにODA を利用しようとする。

もちろん国際ボランティアなどで草の根交流を実行している人はたくさんいるし、多くの人は純粋な友好親善をイメージして異文化交流という言葉を用いるのだが、そうした個人レベルとは違って、国際関係レベルで社会を動かすのはやはり経済利益になってしまうという事なのではないだろうか。

環境や人権のような、ある意味では経済発展に相反するグローバルな問題を軸として、異文化理解が語られるようにならなければならない時点にきているのではないかと考えさせられた。

（この項照屋敦）



スピーチコンテスト ＆ パネルディスカッション

平成７年11月４日土曜日、広島大学統合移転記念事業の一環として大学会館大集会室で、留学生によるスピーチコンテストとパネルディスカッションが開催され、同時に開催されていた大学祭にも負けない充実したひとときとなった。

《飛び出す名(迷？)スピーチの数々》

午前10時から行われた留学生によるスピーチコンテストには、広島大学に限らず、広島市立大学や広島修道大学からも留学生たちが参加した。参加者10人のうち７人までが中国からの留学生で、残りの３人はそれぞれマレーシア、インドネシア、ブラジルの出身。所属及び氏名は以下の通り（スピーチ順）。

広島大学大学院社会科学研究科	谷人旭さん（中国出身）
広島大学大学院国際協力研究科	張岫さん（中国出身）
広島大学総合科学部２年生	ノウル・アイザ・アバスさん（マレーシア出身）
広島市立大学国際学部２年生	張玫さん（中国出身）
広島大学大学院教育学研究科	賈斉さん（中国出身）
広島大学工学部研究生	周剣光さん（中国出身）
広島大学大学院国際協力研究科	ドニー・アキルディンさん（インドネシア出身）
広島修道大学商学部研究生	張愛花さん（中国出身）
広島大学大学院工学研究科	費思平さん（中国出身）
広島大学大学院社会科学研究科	チエ・ヒロセさん（ブラジル出身）

多数の応募の中から書類選考であらかじめ絞り込まれた彼らだが、始まる前に緊張のあまり「コワイ～」と漏らす声もあった。スピーチの内容は「新しい広島大学に期待するもの」または「広島に留学して思うこと」のどちらか。自分の選んだテーマに沿って、慣れないながらも一生懸命日本語を使ってスピーチを行った。中には日本人顔負けの祝辞を述べたり、または持ち前のユーモアで会場を笑いの渦に巻き込んだり、いろいろな個性がそれぞれのスピーチから伺えた。

審査は難航したが、一位には「広島に来て初めて、ひっそりと生きて来た被爆者の《こころ》が分かりました。中国にも規模は違えど『ヒロシマ』があります。皆さんも中国に来て私たちの《こころ》を知ってください」とスピーチした谷人旭さんが選ばれた。二位には総科06のノウル・アイザ・アバスさんが選ばれた。イスラム教徒であるため毎日の祈りを欠かさない彼女は、西体育館のシャワー室で祈り用の白い服を着て祈っているところを目撃され、「お化けー！」と叫ばれた、というエピソードを披露してくれた。三位に選ばれたドニー・アキルディンさんは、西条キャンパスの駐車場事情についておもしろおかしく語り、笑いを取ったという点では一番だった。もちろん、駐車場不足を解決するための方策についてもしっかり触れていた。また、審査員特別賞には留学生の置かれた経済的に不利な状況や、日本人の排他性にも触れた切実なスピーチで、ドニーさんのスピーチに沸き立った会場を一転して静まり返らせた張愛花さんが選ばれた。惜しくも選にもれた参加者たちにも、参加賞が贈られた。

《パネルディスカッション》

午後2時に始まったパネルディスカッションは、本学工学部の廣安博之教授をコーディネーターとして、5人のパネリストと共に聴衆も含めて行われた。「統合移転を完了した広島大学に期待するもの」というテーマでさまざまな意見が盛んに交わされた。

パネリストには、本学卒業生の文系代表として、政経学部卒で山口放送の取締役、その他多くの役職、委員や会長を務める磯野恭子さん、理系代表として大学院工学研究科卒で、マツダで車両の研究開発を担当している農沢隆秀さん、学生代表として大学院社会科学研究科の中村伸司さん、留学生代表として大学院社会科学研究科に在学中で本学留学生協会会長を務める皮自力さん、地域代表として板橋さざなみ幼稚園理事長で下見学生街の整備に携わりながら東広島サロン大学事務局長も務める難波元実さんの5人が招かれた。

《社会から見た広島大学》

唯一の女性パネラーである磯野さんは、特に女子学生に向けて、報道で取り上げられている就職難に対し、求められているところへ積極的に出て行くこと（むしろ男子学生に言うべきことかもしれない）を提言した。「男性の設計した社会に風穴を開けるつもりで、チャレンジ精神をもって臨んでほしい」と語る磯野さんは、本誌のインタビューに答えて「男子学生は、職場において女子社員を女性としてではなく、一人の人間として見て、平等に扱ってほしい。学校教育の中で男女平等に扱われてきた女子学生は、就職によって初めて様々な差別に直面して悩んでいる。男子学生はその痛みを理解し、共に分かち合ってほしい。もちろん女性は甘えずに、勉強して変えて行かなければ」とも述べている。

また、人材育成や新入社員教育にも携わる農沢さんは、「最近の学生は実体験離れ、モノ離れの傾向が目立つ。また、分からない領域について考え、それを乗り越えて行くのに必要な概念構成能力は、企業に入って仕事をして行く上で重要だ。学生への教育をもっと充実させてほしい」、また「研究者も自分の研究だけではなく教育やその他のプロジェクトなどに参加し、それらも評価に加えてもっと力を入れてみてはどうか」など、企業の立場からなかなか厳しい意見を述べた。実利的な面を強調した意見が目立ったが、確かに大学が外部から受ける刺激も重要であろう。

《ないない尽くしじゃ始まらない》

また、学生代表の中村さん、留学生代表の皮さんからは、それぞれ「東千田に比べて施設、アルバイト、交通の面で不便である」、「全学生の3.5%を占める留学生への教育面、生活面のケアでまだ足りない点がある」などの意見が出された。これに対し、地域代表の難波さんは「ないない尽くし、とよく言われるが、これから創って行こうという考え方ができないものか。街がよくなれば大学もよくなるし、大学がよくなれば街もよくなる。まずお互いによく知り合って、何ができるのかを考えなければならないのではないか」と発言。中村さんも「学生の方から地域にもっと働きかけてみたら？」と提言した。

この問題に対して難波さんは、本誌とのインタビューの中で「学生とのつながりをどう持ったらいいのか、よくつかめていない」と、適当にごまかさず正直に答えてくれた。真剣に考えている証拠だと思う。「昔は大学祭などで学生が地域にいろいろ働きかけて来たが、今は大学が大きくなって学生一人一人の顔が見えて来ない。街造りへの提言を、市民としてやってほしい。その提言が実現できるかどうかは学生にはわからないだろうが、それは行政や社会人が考えるからとにかく声を出してほしい。内輪から外へ、初めは小さなウェーブかもしれないが、それを大きなムーブメントにつなげていけばよいだろう」と言う。日常のいろんな不満や希望に基づく草の根的な運動が大事、という事だ。実際、筑波などではそういう希望が実現していった例があるという。

《統合移転の光と影》

また、聴衆の中から生物生産学部の岡本敏一教官が「移転は完了していないのでは。市内にはまだ医・歯学部、法・経二部、附属が残っている。これらも当初はこっちに来るという話だったが、結局抜けてしまった。事務局もまだ残っているではないか」という提言もなされた。コーディネーターの廣安教授も最初に統合の経緯に触れていたが、大学紛争のあおりを受けて組織された広島大学改革委員会がこの統合移転を決定したのが昭和47年。最終的に法、経、学教が移転した平成7年まで、実に23年もの歳月が流れている。この辺の事情について磯野さんは「まず移転というプランありきだったが、現実にはそこからいろいろ抜けてしまった。それはそれで、あるものを充実させて行こう」と述べた。

このようにさまざまな意見が述べられたが、やがて時間を迎えて今回のパネルディスカッションは終了した。

東広島市の人口のほぼ十人に一人は広大生である。これからの西条における街作りに私たちが関与し、学生生活を充実させて行くためにも、また新しい広島大学の歴史を築いて行くうえでも、広大に関係するすべての人々が広大について意見を言い、時には文句をぶつけあうといった場が必要なのではないだろうか。難波さんの言うように、我々にはまずお互いを知ることが必要なのだ。

統合移転の裏にはさまざまな事情もあることだろう。しかし、昭和47年といえば、少なくとも学生編集委員はまだ誰も生まれていなかった時代である。はっきり言えば「そんなもん俺らにゃ関係ない」のだ。そういった事情を覆い隠さず公開してみんなが知ることも重要だが、もっと重要なのはこれからではないか。広島大学の大部分はすでにこの西条に来てしまっているという現実を見据えた上での、幅広く息の長い議論が、これから広大に求められて来るのではないだろうか。我々のような広報関係者がその架け橋となるべきなのかもしれない。

《統合移転と総合科学部の関係》

パネルディスカッションでの統合に関する「期待しているが、各学部のつながりが見えて来ない」という農沢さんの意見は、総合科学部にとっても重要な問題を提起している。細分化されたさまざまな研究分野をどうつなげて行くのか。創立22年目を迎える総科はこれまでこの問題に関して何かを見つけることができたのだろうか。また、これからの広大についての磯野さんの「個性化、多様化、加えて専門性を求める。ヒロシマということで、平和学などを核にした授業をやってもいいのではないか。時代に対応したカリキュラムを作ってほしい」という意見も重要だ。総科は総科であると同時に、各学部のいわゆる「教養教育」を受け持つ「教養部」（敢えてこう書かせてもらう）としての面ももっている。この面で、総科がイニシアティヴをとることもできるのではないか。

実は総科も、大学紛争のあおりを受けた一連の改革によって生まれた存在である（多くの学生にとってはそれもとっくに風化してしまっているのだが）。そういう意味で、統合移転と総科に何らかの共通の課題があってもおかしくはない。統合移転完了に際して、総合科学部にできることは結構あるのかもしれない。サークルと化している、と言われるほど群れやすい、いや、結束の固い総科生なら、難波さんの言う「ウェーブ」を起こし、それを「ムーブメント」につなげて行くことができるのではないだろうか。（文責：渡邉忠信）